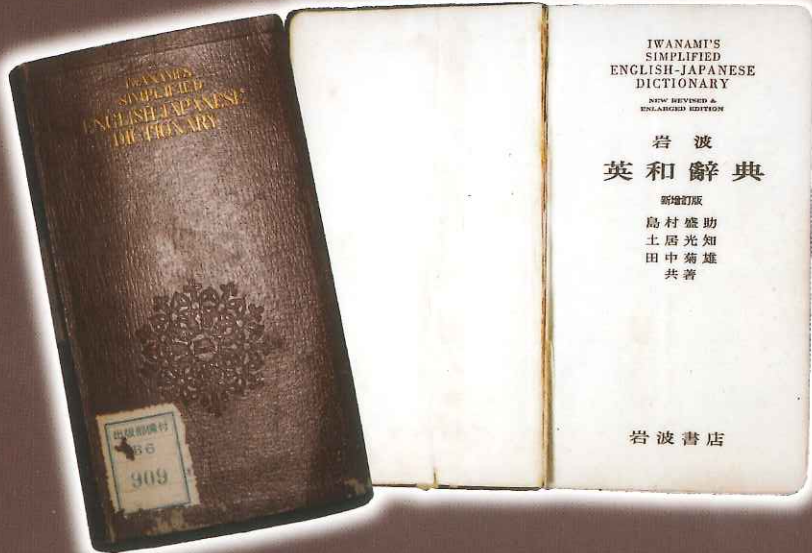


— 日本語と英語をつなぐ

だれよりも言葉を大切にした英語学者

島村盛助



— 英語と日本語をつなぐ —

だれよりも言葉を大切にした英語学者「島村盛助」

四月、わたしは、前原中学校に入学し毎日楽しく通っている。通学路も変わり、小学校の時に何気なく見ていた景色も、違った感覚で新鮮な気持ちになる。その通学路の途中に、緑に囲まれた立派な門構えの家がある。道に面してそびえるように立っている二本の太い椋の木が印象的だ。

わたしは、そこを通るたびに気持ちが落ち着くような不思議な気持ちになった。早朝の柔らかな日差しに包まれた大木の上の方からは、小鳥のさえずりが迎えてくれた。また、夕暮れ時には、門から母屋までのゆるやかなカーブを描いた通路の両側にある低木が、緑色のカーテンを垂らし、部活で少しつかれた気持ちをなぐさめてくれた。「この家には、どんな人が住んでいるのだろうか。ずっと前から暮らしているのかな。夕食の時に、このことを話題にすると、祖父が、

「あのお宅は、島村さんといって明治の頃には百間村の村長さんを務めていたんだ。その息子の盛助という人は、子どもの頃から勉強にはげみ、有名な英語の学者になられたんだよ。わたしも、何度かおじやましたことがあるよ。」

「えっ、英語学者。それじゃ、英語の本なども書いていたの。」
「たしか、有名な英語の辞書をつくっているはずだよ。」



わたしには、あの日本的な家のたたずまいと、「英語」とが結びつかなかった。ましてや、自分の住んでいる宮代町に有名な英語学者がいたなんて聞いたこともなかった。中学での英語の勉強は、楽しかったが、「日本人なのに、英語を学ぶってどういうことなのだろう。」そんな疑問も心の中にあつた。わたしは、祖父の話聞いて何だか興味がわいてきた。

次の日の朝も、椋の大木と門が、いつものように迎えてくれた。表札を見ると祖父の言う通り「島村」とあつた。英語の授業中、「島村盛助」という名前が何度も頭の中に浮かんできた。放課後、わたしの足はパソコン室へ向いていた。キーボードで「島村盛助」とゆっくり入力してみた。すると、画面にゴシック文字の「島村盛助」が幾つも飛び込んできた。わたしは目を丸くした。「すごい。こんなにたくさん。」各ホームページを開いていくと、島村盛助が編さんした「岩波英和辞典」は、今でもその評価が高いこと、また英語の翻訳を中心にも多くの作品を発表していること、さらに、夏目漱石をはじめとする文学者と交流があつたことなどが書かれていた。

その中に、宮代町郷土資料館で特別展「英文学者 島村盛助」を開催した情報もあつたので、休みの日に訪ねてみようと思つた。

資料館では、学芸員の方が資料を使つていてねいに説明してくれた。

「盛助さんは、明治十七年、百間中村、今の宮代町字中に生まれました。」

小さい頃は、父が愛好していた俳句の影響を受けて育ちました。盛助自身も、短い言葉



で様子や気持ちを豊かに表現する俳句に興味を持ち、生涯を通して続けました。学生の頃から、英語で書かれた本を読み、東京帝国大学（現在の東京大学）で英文学を学びました。在学中には英語の翻訳をしたり、小説などの作品が当時の雑誌や新聞にのったりするなど、才能を発揮しました。

その後、盛助は英語教師への道を歩みました。

旧制山形高等学校（現在の山形大学）で英語科の教授を担当する中、日本の研究員としてイギリスに渡りました。そこで、盛助は一生けんめい英語を研究しました。でも、学べば学ぶほど自分たちが使っている日本語の大切さを感じるようになり、ついに、その英語にふさわしい日本語にすることができると考えました。互いに心から通じ合うことができると考えました。

そして、帰国したのち約七年の歳月をかけ、他の二人の協力者と一緒に、盛助の思いを「岩波英和辞典」編さんを通して実現していきま

した。盛助は、一つの単語の意味を訳すためのよりふさわしい日本語を見つけたために、何度も何度も修正を繰り返しました。元の原稿が注意書きで真っ赤に染まってしまったというエピソードも残っています。初めは、一、二年でできると思われていたのですが、およそ三万四千語を完成させるのに七年もかかりました。盛助は、それほどまでに地道に、しかも情熱的にこの仕事を進めました。

当時、盛助に学んでいた学生の一人は次のように語っています。

「シェイクスピアを先生が訳すと、あたかも初めから日本語で書かれたかのようになめら

かで美しい文章になっていました。」

最後に、学芸員さんはこのように話してくれた。

「英語を理解することは、自分たちの国の言葉を理解すること。つまり、盛助さんは、英語学者でありながら、英語以上に日本語という言葉を大事にし、二つの言葉を結びつけてくれた方だったのですね。」

わたしは、学芸員さんが自分のことのように話してくれる姿が心に残った。また、ホームページで紹介されていた「初めて買った敬愛する岩波英和辞典（島村盛助）」の文章を思い出し、今でもこの辞書を大切にしている人の気持ちがあつただけでなく、盛助の姿が見えるようで何だかほこらしい気分になった。そして、日本語のもつ響きや美しさを大切にすることに信念をつらぬき英語を研究し続けた盛助の生き方に強く心を打たれた。

「自分も目標に向かって、いっしょうけんめいがんばっていきましょう。」

あの大木と門、緑に囲まれた盛助の住まいは、いつもわたしに語りかけてくれている。



豊かな自然や家庭に 生まれ育った「盛助」

島村盛助は、明治一七年（一八八四年）八月九日、百間中村（現・宮代町字中）に生まれました。島村家は、江戸時代から続く古い家で、村の名主（村を治める家）を勤めていました。代々、俳句を好み「松尾芭蕉」の流れをくむ多少庵で中心となって活動しました。盛助も幼い頃、父に連れられて句会に参加し、その後自らも生涯俳句を詠み続けました。

父（繁）は、武道に励み道場という剣道場も開きました。さらに、百間村の村長になり、百間小学校の校舎新築に力をつくしました。

現在宮代町では、小学校での俳句作りや、町の剣友会や空手野球、サッカー、バレーボール等たくさんさんのスポーツ少年団の活動が盛んです。

宮代町は、このような風土と環境が昔から続いているのかも知れません。

このような中で、盛助は「百間小学校」、「旧制浦和中学（現浦和高校）」に学びました。

英文（語）学者 「島村盛助」1

島村盛助は、大学在学中から英語の本を翻訳（英語の文章を日本語に訳す）し、大学の雑誌に発表しています。

学生でここまでできることは、英語と日本語がかなり堪能だったということがうかがえます。

当時の有名な文芸誌「ホトトギス」や「赤い鳥」にも出筆しました。盛助のペンネームは、「琴三」です。

そして、盛助が心血を注いだ「英和辞典の編さん」は、大変な作業でした。それまでの辞書は、ひとつの言葉をよく使われる意味の順に配置していました。しかし、盛助の辞書は、言葉の語源からはじまり、言葉が使われてきた順に配列するというものでした。これは、岩波書店から出版された最初の語学辞典となりました。

さらに、盛助は世界的にも有名なミルトン作の「失樂園」の翻訳も、気品（気高く上品）あふれる日本語で行いました。盛助は、この作業の半年後に亡くなりました。

盛助が詠んだ俳句

俳句短冊 2点 / 島村満彦氏所蔵

（表）右翼手のグラウに高し秋の空 琴三

右翼手のグラウに高し秋の空 琴三

（裏）満彦野球戦の大手柄

昭和十四年八月二十二日

満彦野球戦の大手柄

（表）桃の日の桃の灯や子のつどゐ 三

桃の日の桃の灯や子のつどゐ 三

（裏）京子へ 昭和十年三月三日

京子へ 昭和十年三月三日

（裏）京子へ 昭和十年三月三日

京子へ 昭和十年三月三日



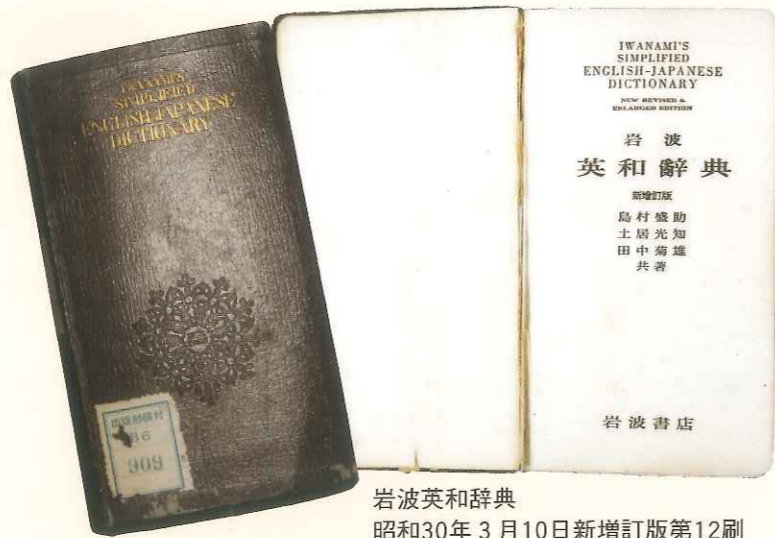
盛助が生まれ育った生家

島村盛助の生い立ち

年号	年	西暦	事柄
明治	一七	一八八四	埼玉県南埼玉郡百間中村に生まれる
明治	三六	一九〇三	第一高等学校（東京大学予科）に入学
明治	三九	一九〇六	東京帝国大学（現東京大学）入学
明治	四二	一九〇九	東京帝国大学（現東京大学）卒業
大正	元	一九一二	埼玉中学校（現不動ヶ岡高校）教諭となる
大正	九	一九二〇	旧制山形高校（現山形大学）教授
大正	一一	一九二二	文部省よりイギリスへ派遣留学
昭和	五	一九三〇	岩波英和辞典の編さんを始める
昭和	一一	一九三六	岩波英和辞典完成
昭和	二六	一九五一	ミルトン「失樂園」の翻訳完成
昭和	二六	一九五一	岩波英和辞典増補改訂版の出版



百間学校上棟祈念 メダル
明治42年11月3日
宮代町郷土資料館 所蔵



岩波英和辞典
昭和30年3月10日新增訂版第12刷
宮代町郷土資料館 所蔵



島村盛助 肖像写真
イギリス・オックスフォードにて
島村達彦氏 所蔵



小説『渚』掲載「ホトトギス」
明治44年5月1日号
横内美穂氏 所蔵



童話『村の寶』掲載
「赤い鳥」（復刻）
大正7年12月号（第1巻6号）
島村達彦氏 所蔵



ミルトン作『失樂園』昭和57年刊行
宮代町郷土資料館 所蔵

英文(語)学者

「島村盛助」2



読売新聞朝刊の小説として
連載された「貝殻」
明治45年7月13日
横内美穂氏 所蔵

辞書が完成した時に詠んだ句

俳句短冊 / 島村満彦氏 所蔵

(表) 水温む算に筆を洗ひたり 葵三三

水邊を算に筆を洗ひたり 葵三三

(裏) 昭和二十六年三月十五日

辞書修正ほ、完成

昭和二十六年三月十五日
辞書修正ほ、完成

野矢修三氏 所蔵

この句の日付は昭和26年3月15日になっています。この年の5月10日には、増補改訂版の岩波英語辞典が出版されていますので、ここに見える「辞典修正ほ、完成」の文字は、増補改訂版に関する作業が完了したことを示していると思われます。

百間中の校舎竣工に詠んだ句

俳句短冊 / 島村満彦氏 所蔵

(表) 校舎竣ち菊香る村安らかに 葵三三

校舎竣ち菊香る村安らかに 葵三三

(裏) 昭和二十六年十一月二十三日

絶筆 百間中学竣工の日賀句

昭和二十六年十一月二十三日
絶筆 百間中学竣工の日賀句

地元宮代町にある百間中学校の校舎の竣工に際して詠んだ句です。

盛助が『亜細亜の光』の翻訳を最初に発表したのは、「山形高校校友会雑誌」でした。翻訳が完成後、岩波文庫から出版されました。仏陀の一生を賛美した抒情詩で、文語調により訳されています。



「亜細亜の光」原稿
島村満彦 所蔵

「亜細亜の光」
折原静佑 所蔵

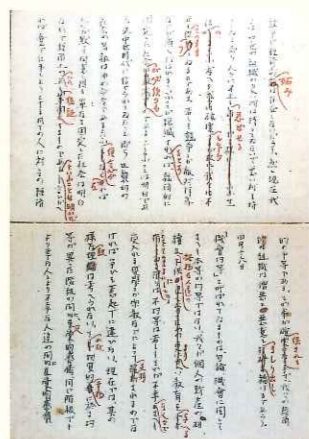
～言葉に厳しかった「盛助」～



盛助 肖像写真(年代不明)
山形において
島村達彦氏 所蔵

子息の彩彦氏によると、帝国大学の英文科を受験するにあたり、「英語以外は勉強しなくて良い」と父親・盛助から言われ、本当に英語しか勉強させてもらえなかったそうです。とにかく翻訳をするように言われ、大学ノートに翻訳文を書いては父・盛助に添削をしてもらおうといった受験勉強だったそうです。これは、トマス・カーライルの『英雄論』を訳しているもので、赤字が添削部分です。添削を受けるたびに、「親父の訳はすごい。」という感想を抱いたそうです。

山形高校での英語の授業では、生徒に文章を翻訳させ、その訳し方が上手くないとそっぽをむいてしまうといったこともあったそうです。「とにかく言葉には厳しかった。」とお話してくださいました。



彩彦氏翻訳・盛助氏添削
受験勉強の大学ノート
斎藤彩彦 所蔵

「夏目漱石」と

「島村盛助」

盛助は、生涯において多くの著名な人々と親交がありました。

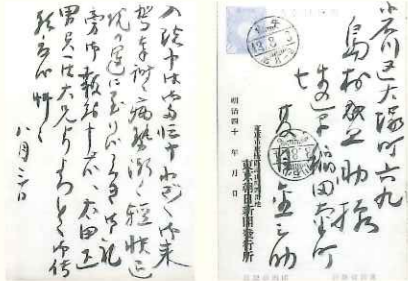
特に、「夏目漱石」は、第一高等学校時代の恩師であり英文学を志した先輩でもありました。

漱石も文部省の派遣でイギリスに留学していますが、盛助もまた同じようにイギリスに渡り研究しました。下の葉書は、漱石の病氣を見舞ったお礼の内容です。

さらに、北原白秋、阿部能成をはじめとする、近代日本を担った著名な方々との交友がうかがえます。内容をみると、考えや意見を伝えるものから、宮代を訪問した感想、お酒を好んだことや近況報告などがあり、盛助の豊かな人間性が伝わってきます。

(本文)
入院中は御多忙中わざわざ御来駕奉謝候、病勢漸く軽快、退院の運に至り候につき、御礼旁御報告申上候、(略)

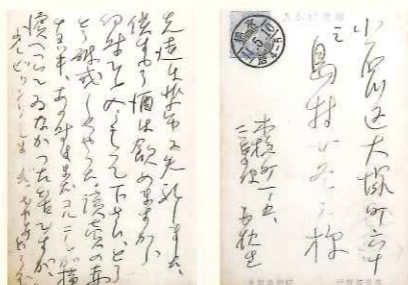
夏目漱石は第一高等学校時代の恩師にあたります。卒業後も親交があり、漱石の日記にも盛助が訪れた時の記述が見られます。この葉書は有名な「修善寺の大患」の直後の日付であり、7月に入院していた漱石を盛助が見舞ったことが日記に記されており、この見舞いについての礼状と思われる。



夏目漱石 葉書 明治43年8月3日
島村満彦氏 所蔵

(本文)
先達は非常に失礼しました。僕はもう酒は飲めませんから何時でもさそって下さい。とうとう破戒しちゃった。読売の赤チョコッキ、あのときはまだコルテンが横濱へついておなかつた筈ですが、少々びっくりしました。じゃあ、どうぞ。

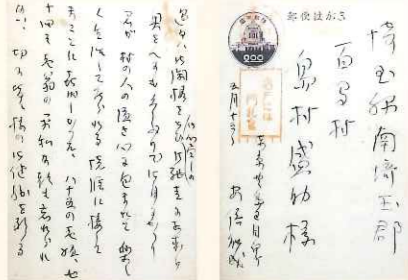
北原白秋とは、文芸活動を通じて始まった親交と思われます。盛助はお酒もタバコも好きだったそうですが、白秋と誘い合わせてお酒を飲んでいた様子が見えます。



北原白秋 葉書 明治44年5月10日
島村満彦氏 所蔵

(本文)
過日は御閑楼をとひ、御心尽くしの御馳走に相成り、奥さんにも久しぶりで御目にかかり、君が村の人の温き心に包まれて、楽しく生活して居られる境涯に接して、誠に喜ばしかった。(略)

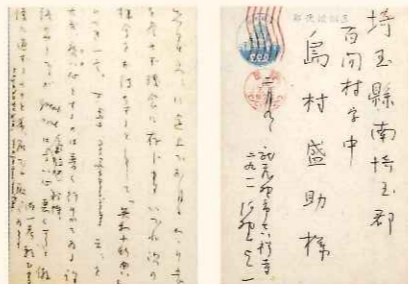
安部能成は大正から昭和にかけての哲学者です。戦後は、文部大臣や学習院の院長などを務めました。能成とは、旧制第一高等学校のころからの親交と思われます。この葉書から、能成が盛助を訪問したことが伺えます。



安部能成 葉書 昭和26年5月13日
島村満彦氏 所蔵

(本文)
先日は久々に途上でお目にかかり意を尽くせず残念に存じます。いづれ次の機会をお待ちするとして「英和小辞典」につき一言。P497magnanimous云を大変広い心とするのは普く行なはれてある訳語のやうですが、great soulは気位の高い心、矜持、悪くすこと、傲、御一考願ひます。(略)

河野与一は哲学者です。東北大学で教鞭をとりました。この葉書の日付をみると、ちょうど盛助が岩波英和辞典の増補改訂版を作る取り組みをしている時期にあたります。



河野与一 葉書 昭和26年2月9日
島村満彦氏 所蔵

郷土の先賢に学べ ― 英文学者・小説家、島村盛助の生涯 ―

元越谷市教育委員会教育長 齊藤 宥雄
埼玉県道徳教育研究会会長

若き学徒の師範に示された教育学者・森信三先生は、「一日一語」の中で次のように述べている。

- 一、「人生二度なし」これ人生における最大の真実なり
- 一、書物は人間の心の養分なり
- 一、人は「朝のあいさつは人より先に！」これを一生つづけることは、人として最低の義務というべし。
- 一、いかなる人に対しても、少なくとも一点は、自分の及びがたい長所を見出すべし。
- 一、一切の悩みは比較より生じる。
- 一、とさとされているが、さらに、次のことが注目される。

○人生に師をもて

「自分を育てるものは、結局自分の他ない」ということと、「人生の師」を求めるといことは、矛盾しないし、両方相まってこそ、成立するものであり、われわれ人間は「師」をもたなければならぬ。もしそれが終生をつらぬく「人生の師」であったら、それはこの世における最上のしあわせである。」とのべられていることが、その理由として、書物に書かれた真理を平面的だとすれば、「師」を通して得られる真理は立体的だからだといえます。そこで人生の真理を身をもって探究しようとする人は、まず自分と縁のある人びとなかで、自分をもっと深く尊敬できる人でありどこかで一脈通じうるものを持つている人を「師」として立て、心を空しゅうしてその方に学びながら、自分を育てることが大

切だということでありませう。

― 郷土偉人島村盛助の歩み ―

百間小学校―浦和中学校(旧制五年)―第一高等学校(旧制)―東京帝国大学(現東京大学)を卒業した。

農村出身という片田舎の少年の夢は余りに大きく驚るばかりであった。盛助少年の心は父(百間村々長)の子どもと生まれ、当時の農村の不況について、父の苦悩を身にしみて感じとっていた。

そのためには、日本国中の少年たちのあこがれである一高―東大への最難関の道を選んだのではないか、それにしても盛助少年の未来への志望が大きいものであったが推察される。

小学校から遠い浦和中学校に入学したときには、すでに第一高等学校―東京大学への進学という大難関への挑戦ははじまっていたと思うのです。この最高にして最難関の目標を少年の心の中でどのように描き、学んだのか考えるだけでも苦悶の情にさいなまれることである。

そのような目標を突破したとき、村民の驚きはもちろん、県内の人々も驚いたほどで、それこそ、埼玉から一高に入る学生がいかに少なかったかがわかる。

よき「師」との出会い

盛助は、一高から東京大学に進んだ、その同窓には、後の文部大臣・学習院々長・安倍

能成も夏目漱石の同じ門下生であった。

盛助たちは英文学者であった漱石の教を仰ぎその言行を身につけていったということである。

資料には、その人として知られている安倍学習院々長が親しく盛助宅を尋ねた記録がみられる。

その中に、当時の村の風景が語られているその郷土こそ、われわれのふるさと盛助の育った風土などだと思ふ。

「過日は御閑樓をとひ、御心づくしのご馳走に相成り、奥さんにも久しぶりで御目にかかり、君が村の人の温かさに心に包まれて、楽しく生活して居られる境涯に接し、誠に喜ばしかった。」と再会の喜びを寄せている。

盛助は、東大卒業後、山形高校(旧制)で教壇に立ち、当時の同僚であった田中菊雄と共に十五年の歳月をかけて英和辞典(岩波書店)をはじめ編さんしたことは、快挙というほかない価値ある辞典となった。

その他翻訳ものとしては、ミルトン作の『失楽園』はすばらしいものである。

このようにして、夏目漱石なきあと盛助は漱石の二世とまで呼ばれる業績をあげているのを見ても、「師」を持つこと、その師の教えを身につけることも大切なことが分かりますが、皆さんの郷土には他にない先師賢人がおり、学びの道そして生き方の道にすばらしいモデルをもっていることにうらやましい限りで、どうぞ大きな夢をもって進んで下さい。

島村盛助氏 道徳資料刊行にあたって

宮代町長 榊原 一雄

ここに、島村盛助氏を顕彰する児童生徒用の道徳資料が刊行する運びとなりましたことは、私の大きな喜びとするところであり、関係の皆様方のご努力に対しまして心より敬意を表します。島村盛助氏は私が中学生のころ出会った中で最も感銘を受けた人物であり、子供心に深い知性と安らぎを覚えたことが未だに心の奥に残っています。

平成15年に郷土資料館特別展として島村盛助没後50年展を企画開催したのをきっかけに改めて島村盛助氏の素晴らしさに気づき、町として顕彰する必要性を強く思いました。

そこで、本資料を通して児童生徒の皆さんに郷土が生んだ英語学者・島村盛助氏について学んでいただき、町の誇りを持つと同時に英語学習に関心を持って勉学に励まれ、将来に夢を持ってこれからの国際社会を豊かに生きぬいてほしいと思います。

宮代町教育委員会教育長 桐川 弘子

島村盛助氏は長い間英語教師として活躍し、教育者としても大きな足跡を残しています。また、英文学者としては翻訳や小説を数多く残され、その言葉の確かな表現と美しさに特徴があるといわれ、今なお評価の高いところで、現在、活字離れ、表現力の低下など、日本語に対して混乱が生じており、正しい日本語のあり方に関心が高まっています。

ここで島村盛助氏について学ぶことにより、小中学生の皆さんが文化としての日本語の大切さと心を表現する言葉を豊かに身につけることの必要性を感じとり、その上で英語をしっかりと学ぶことの大切さに気づいてほしいと思います。そして、将来、国際社会の中で尊敬される日本人として、大いに活躍してほしいと願うものです。

この本を作るのに、ご指導ご協力をいただいた方々(敬称略)

島村盛助関係者
齋藤 彩彦
齋藤 東彦
島村 達彦
島村 春江
島村 満彦
齊藤 宥雄

この本を作成した人

宮代町長 榊原 一雄
宮代町教育委員会教育長 桐川 弘子
宮代町教育委員会教育推進課長 織原 弘
宮代町郷土資料館長 中村 修
宮代町郷土資料館 青木 秀雄
河井 伸一
横内 美穂
中里 佳美
元島 幸子
坂田 稲生
宮代町立笠原小学校 竹本 美子
宮代町立須賀中学校 遠藤真理恵
宮代町立百間中学校 渡辺 真澄
宮代町立前原中学校 八木橋孝雄
宮代町教育委員会 小林 尚
石井富士子
大塚 健嗣

表題

宮代町教育委員会教育長 桐川 弘子

挿絵

宮代町立前原中学校 石川 清子



—日本語と英語をつなぐ
だれよりも言葉を大切にした英語学者—

島村盛助

編集・発行／宮代町教育委員会
